

フッサールの『危機書』の前夜

堀 栄造

序言

エドムント・フッサール（1859~1938）は、自己の最晩年（1936年）の大著『ヨーロッパの諸学の危機と超越論的現象学』（『危機書』¹）の第三部（最終部）において、「(A) 前所与的生活世界からの遡行的問いにおける現象学的超越論的哲学への道」と「(B) 心理学から現象学的超越論的哲学への道」という超越論的現象学へ至る二つの道を取っている。フッサールは、自己の哲学者としての全生涯の総決算とも言える『危機書』において、なぜこうした構成の仕方をしたのか。本論は、フッサールの『危機書』の前夜とも言える1933年から1935年へ至る時期に執筆された草稿²に基づいて、その謎を解明する。

本論は、第一節で、1933年3月初めの時点での「現象学的方法の開始点としてのエポケー（判断中止）」を吟味し、最晩年の現象学の射程の構造を明らかにする。第二節で、1933年8月半ばの時点での「前所与性から出発する遡行的問いのあり方」を吟味し、最晩年の問題究明の里程の構図を明らかにする。第三節で、1933年9月の終わりの時点での「自然的生を前提とした普遍のエポケー」を吟味し、世界内的現象学（現象学的心理学）には隠されたままであった超越論的構成の「露呈」ないし「解釈」ないし「解明」が超越論的現象学において遂行されることを明らかにする。第四節で、『危機書』で取られる超越論的現象学へ至る二つの道つまり「存在論を介しての道」と「心理学を介しての道」の1934年春の時点での胚胎を明らかにする。第五節で、1935年1月時点での「最晩年の超越論的現象学的本質把握の方法としての超越論的想起」について明らかにする。第六節で、1935年秋の時点での「最晩年の超越論的現象学的本質把握の具体的操作としてのヴァリエーション」について明らかにする。

〔1〕エポケーの二重の意味

フッサールは、おそらく1933年3月初めのものだと思われる草稿の中でエポケーに関して考察し、次のように述べている。「私は、無関心の傍観者[unbeteiligter Zuschauer]として世界の存在確信[Seinsgewissheit der Welt]や自然的な日常の生[natürliches Dahinleben]を超越する[sich erheben]ことができる」³。もちろん、無関心の傍観者としての現象学者によって超越されるべきこの時期のエポケーの対象は、世界経験であり、自然的態度をとる日常的生である。そして、フッサールは、エポケーを「自然的な仕方ですべて遂行され、そして遂行の中に依然としてとどまる世界経験の内部での自然的存在遂行の禁止、エポケー行使、差し控え[*das Inhibieren, das Epoché-Üben, Enthaltung von natürlichem Seinsvollzug*]⁴と規定している。ここで言われている「自然的存在遂行」とは事物経験のことであるが、フッサールは、事物経験について次のように述べている。「或る事物を経験することは、つまり、普遍的世界形式[*die universale Weltform*]は、地平[Horizont]であり、地平において事物はあり、事物の存在は世界-内-存在[*In-der-Welt-Sein*]であり、それは、世界全体におけるこうした部分性においてのみあるがままのものである。世界の存在は、事物の存在よりも先立つ」⁵。ここで、世界の存在は、事物の存在よりも先立つ、と言われているが、それは、「エポケーの二重の意味」にかかわる。つまり、エポケーは、世界内の次元の世界内の現象学(現象学的心理学)においては、個別的実在者についての事物経験に対して行使されるのに対して、超越論的次元の超越論的現象学においては、世界全体についての世界経験に対して行使されるのであり、世界内の現象学(現象学的心理学)的エポケーと超越論的現象学的エポケーという二重の意味をもつということである。

したがって、フッサールは、世界内の現象学(現象学的心理学)から超越論的現象学への移行に応じてエポケーも移行することを念頭に次のように語るようになる。「個別的実在者に関する或る進行するエポケー[*eine fortschreitende Epoché hinsichtlich der einzelnen Realen*]が決して或る世界エポケー[*Weltepoché*]へ至りえないということもまた明らかであり、そして、私の外の一切の個別的実在者に関する或るエポケーという体系的形態において全く或る世界エポケーへ至りえないし、おくれればせながら、実在的人間としての私という人間に関する或るエポケー

という体系的形態において全く或る世界エポケーへ至りえない」⁶。それゆえ、1933年3月初めの時点での「最晩年の現象学の射程」は、世界的現象学（現象学的心理学）における個別的実在者に関する個別的エポケーが超越論的現象学における世界エポケーに対して部分的エポケーとして位置づけられるという構造を有するものと言える。

〔2〕前所与性から出発する遡行的問い

1933年8月半ばにシュルフゼー [Schluchsee] で執筆された草稿で、フッサールは、一切の行為し耐え忍ぶ世界生 [Weltleben] における我々人間の世界の前所与的所有 [Vorgegebenhaben] への反省を徹底化することによって、自然性 [Natürlichkeit] を克服し超越論的前所与性を獲得しようとする超越論的現象学的還元へ至る道を叙述している⁷。

その草稿の中で、フッサールは、次のように述べている。「私は、自然的人間性の生のあり方 [die Lebensweise der natürlichen Menschlichkeit] から歩み出ることができるのであり、世界の普遍的な前所与性 [die universale Vorgegebenheit der Welt] を主題化する。しかし、それは、或る抽象的テーマであり、しかも、この前所与性において匿名的に生きる抽象化されたものとしての私の自我の具体化 [die Konkretion meines Ich als des in dieser Vorgegebenheit anonym lebenden herausabstrahiertes] に基づくテーマである」⁸。ここで、自然的人間性の生のあり方と言われているのは、日常的な人間的生活のことであり、それから歩み出るということは、超越論的現象学的還元を意味している。超越論的現象学者は、日常的な人間的な生活から脱却して初めて、それまで匿名的に機能していた世界の普遍的な前所与性を主題化する。つまり、日常的な人間的な生活を送っている自然的態度の人間にとっては、その人間を取り巻く周囲の世界が既に暗黙のうちに前もって妥当するものとして与えられているということを、超越論的現象学的還元を介して初めて主題化するのである。そして、世界の普遍的な前所与性というテーマは、或る抽象的テーマであるが、それは、世界の普遍的な前所与性において匿名的に生きる抽象化されたものとしての私の自我の具体化に基づいて、言い換えれば、自己を取り巻く周囲の具体的世界と相関する自然的態度をとる人間の具体的自我に基づいてその本質的構

造を解明されるというわけである。

このように前所与性から出発する遡行的問いによって超越論的現象学的還元へ至る道を、フッサールは、次のように言っている。「それは、自然的世界内性 [natürliche Weltlichkeit] から、自然的生 [natürliches Leben] が生起するようなきわめて一般的なあり方、私や我々が人間として世界を確信して具体的主観的世界確信の地盤の上で我々の活動的生を生きて世界の中で諸目標を立てる等々のきわめて一般的なあり方に関する考察へ至る道である」⁹。したがって、出発点となる前所与性の次元は、自然的世界内性の次元であり、そこから、自然的生が生起するようなきわめて一般的なあり方を考察する超越論的次元へ、言い換えれば、私や我々が人間として世界を確信して具体的主観的世界確信の地盤の上で我々の活動的生を生きて世界の中で諸目標を立てる等々のきわめて一般的なあり方を考察する超越論的次元へ移行することが、前所与性から出発する遡行的問いによって超越論的現象学的還元へ至る道である。

しかし、フッサールは、自然的世界内性の次元から超越論的次元へ一気に移行するわけではなく、自然的世界内性の次元で人間的心理的規定内容としての世界意識を伴う人間を主題化する世界内的現象学（現象学的心理学）を遂行したうえで、そこからさらに超越論的現象学へ移行する。それゆえ、フッサールは、次のように語ることになる。「我々は、人間的心理的規定内容としての世界意識を伴う人間へ至る最初の遡行は依然として中途半端にとどまったままであるということに気づく。素朴な世界所有の地盤の上で、世界は、存在者の宇宙であり、ひとは、そのうちに人間や自己自身を見いだすのであり、意識生 [Bewusstseinsleben] としての心理的生は、それ自体、心理物理的に分け与えられた認識体験、認識形成体、認識する自我主体、等々の一切を伴って世界の中で進展する」¹⁰。ここで、フッサールは、人間的心理的規定内容としての世界意識を伴う人間を主題化する世界内的現象学（現象学的心理学）への最初の遡行を「中途半端にとどまったもの」とみなしているが、それは、世界内的現象学（現象学的心理学）が究極的遡行としての超越論的現象学への遡行へ至る「中間段階」であることを意味している。

それゆえ、1933年8月半ばの時点での「最晩年の前所与性から出発する遡行的問いの里程」は、自然的世界内性の次元で遂行される世界内的現象学（現象学的心理学）を経由して超越論的現象学へ至るという構図を取るものと言える。それは、

前節で見たように、世界内的現象学（現象学的心理学）的エポケーが部分的エポケーにとどまるものであり、やがては普遍のエポケーとしての超越論的現象学的エポケーへ至らざるをえないということに対応する。

〔3〕 自然的世界生を前提とした普遍のエポケー

フッサールは、1933年9月の終わりに執筆された草稿の中で、自然的生 [natürliches Leben] ないし自然的世界生 [natürliches Weltleben] を前提とした普遍のエポケー（超越論的現象学的エポケー）について叙述している。そして、フッサールは、世界内的現象学（現象学的心理学）的態度と超越論的現象学的態度という二つの主題的態度について次のように述べている。「現象学者として、私は、二つの主題的態度をもちうる。つまり、私は、自然的世界の地盤 [der Boden der natürlichen Welt] の上に立ちうるものであり、言い換えれば、まさに世界妥当の端的な遂行において世界の内生きうるのである。その場合、私は、変様されざる世界経験のうちにあり、必然的に自我 - 人間 [Ich-Mensch] としての自然的自己経験 [natürliche Selbsterfahrung] のうちにある。……つまり、この場合、〈自然的な [natürlich]〉固有の地平が、世界そのものの世界妥当の端的な遂行において必然的に思念される。エポケーが、流れる地平や固有本質的に世界内の自然的地平とともに流れの中の世界妥当全体を括弧に入れ、現象学的経験および思惟が、その働きを行うことによって、今や、世界は、その流れる存在において、新たなものとして超越論的意味を獲得した」¹¹。ここで、自然的世界の地盤の上に立つ現象学者は、世界内的現象学者（現象学的心理学者）であり、自然的自己経験に現象学的分析を施しながら自然的固有の地平の本質的構造を解明する、ということが説かれている。それに対して、超越論的現象学的エポケーを遂行する超越論的現象学者は、世界妥当全体を括弧に入れ、自然的自己経験の自然的意味を超越論的自己経験の超越論的意味へ転換して現象学的分析を施しながら超越論的な固有の地平の本質的構造を解明する、ということが説かれている。

また、フッサールは、世界内的現象学（現象学的心理学）から超越論的現象学への移行に伴う自然的意味から超越論的意味への転換に関連して、次のように述べている。「新たな超越論的意味は、自然的意味をすっかり自己のうちにもっており、継

続的妥当のうちにもっており、継続的訂正のうちにもっているのだが、しかし、自然的意味に対して或る新たな意味を、第二段階の或る意味を割り当て、自然的意味が継続的に形成されるがままに或る意味を継続的に形成するのであり、自然的意味から切り離された意味を形成するのではなく、世界にかかわる意味を、自然的に存在し妥当するものにかかわる意味を形成するのであり、世界そのものを自然的存在の実証されたそして実証されるべき現実性において認識しながら超越論的世界として構成するのであり、超越論的構成の仕方 [die Weise der transzendentalen Konstitution] を、絶えざる超越論的世界創造の仕方 [die Weise der ständigen transzendentalen Weltschöpfung] を〈露呈しながら [enthüllend]〉そうするのである。しかし、それは、或る全体的に新種の〈露呈 [Enthüllung]〉、〈解釈 [Auslegung]〉、〈解明 [Klärung]〉である¹²。ここで、超越論的意味が自然的意味に対して或る新たな第二段階の意味を割り当てると言われているが、それは、世界内的現象学（現象学的心理学）的現象を超越論的現象学的現象へ転換することを意味する。言い換えれば、それは、人間性と自然的存在の実証的現実性との相関を超越論的主観性と超越論的世界との相関へ転換することを意味する。そして、後者を、フッサールは、ここで「超越論的構成」ないし「超越論的世界創造」と呼んでいる。超越論的構成ないし超越論的世界創造の「露呈」ないし「解釈」ないし「解明」は、超越論的現象学によって初めて遂行されるのであり、世界内的現象学（現象学的心理学）には隠されたままであり、その意味で、超越論的現象学的エポケーは、世界内的現象学（現象学的心理学）的エポケーに比して「普遍のエポケー」と呼ばれるのである。

それゆえ、前節で見たように、1933年8月半ばの時点で、「最晩年の前所与性から出発する遡行的問いの里程」は、自然的世界内性の次元で遂行される世界内的現象学（現象学的心理学）を経由して超越論的現象学へ至るという構図を取る、ということが明らかにされるわけだが、1933年9月の時点では、「自然的世界性を前提とした普遍のエポケー（超越論的現象学的エポケー）」によって、世界内的現象学（現象学的心理学）には隠されたままであった超越論的構成ないし超越論的世界創造の「露呈」ないし「解釈」ないし「解明」が遂行されることが、明らかにされる。

〔4〕存在論を介しての道と心理学を介しての道

フッサールは、1933年あるいは1934年のものと思われる未公開遺稿B II 11において次のように述べている。「超越論的エポケーは、次のような問いに基づく心理学的主観的反省によってのみ動機づけられうる。つまり、そのような問いとは、統覚する認識としての我々の世界認識はどのようにして或る転換された真理へ至りうるのか、そして遂には或る真の存在の確信へ至りうるのか、という問いである。帰結における独我論。かくして、もはや、まなざしは、普遍的世界統覚と、こうした統覚する生およびその常習性 [Habitualität] においてのみ具体的であるような普遍的世界統覚を遂行する自我に向けられる。それゆえ、第一のものは、人間における素朴な世界所有および心理学的意識の世界所有の転換としてのエポケーにおける世界統覚およびこの具体的自我の主題化である」¹³。ここで、「超越論的エポケーは、心理学的主観的反省によってのみ動機づけられうる。」とされているが、それは、「超越論的現象学は、世界内的現象学（現象学的心理学）によってのみ動機づけられうる。」という意味である。そして、「統覚する認識としての我々の世界認識が至りうる或る転換された真理」とは、世界内的現象学（現象学的心理学）的真理のことであり、「そして遂には至りうる或る真の存在の確信」とは、超越論的現象学的真理のことである。さらに、「普遍的世界統覚」は、超越論的現象学へ至る「存在論を介しての道」における主題であり、「統覚する生およびその常習性においてのみ具体的であるような普遍的世界統覚を遂行する自我」は、超越論的現象学へ至る「心理学を介しての道」における主題である。それゆえ、「存在論を介しての道」においては、「人間における素朴な世界所有」が世界内的現象学（現象学的心理学）の主題となり、「世界統覚」が超越論的現象学の主題となる。また、「心理学を介しての道」においては、「心理学的意識の世界所有」が世界内的現象学（現象学的心理学）の主題となり、「世界統覚を遂行する具体的自我」が超越論的現象学の主題となる。

このように、現象学は、世界内的現象学（現象学的心理学）によって動機づけられながら超越論的現象学へ移行し、その際の主題も、「統覚する認識としての世界認識」から「普遍的世界統覚とそれを遂行する自我」へ移行する。そして、そのような現象学的考察の出発点とされるものが、「〈我あり〉の必然性」であり、フ

フッサールは、1934年春の時点で実際にそのような現象学的考察を行っている。つまり、フッサールは、1934年春に「〈我あり〉の必然性の意味 [Sinn der Apodiktizität des 〈Ich-bin〉]」について考察している。そして、その考察は、デカルトの「我思う、ゆえに我あり。」という哲学的原理に沿った路線を歩むことになる。つまり、その路線は、「我思う」という思惟に思惟対象として伴われる「事物や世界といった存在」の必然性から遡行して「〈我あり〉という自我存在」の必然性を導出するという路線を歩むことになるのである。

したがって、フッサールは、まず、「世界の存在論的本質 [Ontologisches Wesen der Welt]」について次のように語る。①「私によって現実的にあるいは可能な仕方では経験されるものとしての世界の存在論的本質。そうした存在論的本質には、一切のヴァリエーション [Variation] を貫いて不変でありつづける唯一の個々の実在的なものが属するのであり、しかも、その本質形式には、〈或る人間〉が属するのであり、つまり私が属するのであり、一切の私の自己ヴァリエーション [Selbstvariationen] を貫き私の個性を保持するような或る不変の本質における空間時間的に実在的なものとしてのこの人間が属するのである」¹⁴。これは、フッサールの存在論が、世界内的現象学（現象学的心理学）の主題である世界と人間との相関の本質的構造の解明である、ということの意味している。

そして、世界の存在論に触れれば必然的にそれと相関する人間の存在論に触れざるをえなくなるのであり、フッサールは、引き続き次のように語る。②「この不変の個々の本質には、しかし、身体的 - 心理的なもの [Leiblich-Psychisches] が、私の器官としての身体における私の〈支配 [Walten]〉が属するのであり、それを介して、この身体そのものも我々の身体的 - 世界的で〈有意味の [sinnlich]〉経験作用 [Erfahren] も属するのである」¹⁵。ここで触れられている身体的 - 心理的生は、世界内的現象学（現象学的心理学）の中心的主題に他ならない。

①や②を踏まえて、さらに、フッサールは、次のように語る。③「私の必然的で本質的な人間的存在には、私の多様でその際に絶えず統一的な意識生 [Bewusstseinsleben] が属するのであり、そうした意識生において私はまさに絶えざる世界意識 [Weltbewusstsein]、世界の存在確信 [Seinsgewissheit von der Welt] をもつのであり、そこには普遍的経験 [die universale Erfahrung] が属し、そうした普遍的経験において私は〈その世界について〉或るそのつどの経験領域

〔Erfahrungsbereich〕をもち、……世界の中へ入り込んで経験したり考えたり活動したりなどするものとしての私の世界生の流れ全体〔*der ganze Strom meines Weltleben*〕をもつのである¹⁶。ここで触れられている世界意識や普遍的経験は、超越論的現象学の主題である。そうすると、①から③への移行は、『危機書』の「存在論を介して超越論的現象学へ至る道」を彷彿とさせるものであり、また、②から③への移行は、『危機書』の「心理学を介して超越論的現象学へ至る道」を彷彿とさせるものである。

それゆえ、フッサールは、1934年春の時点での「〈我あり〉の必然性の意味」についての考察の中で、『危機書』で取られる超越論的現象学へ至る二つの道つまり「存在論を介しての道」と「心理学を介しての道」を胚胎しているものと言える。

〔5〕「事実的本質」の把握方法としての超越論的想起

『危機書』で取られる超越論的現象学へ至る二つの道つまり「存在論を介しての道」と「心理学を介しての道」を胚胎したフッサールは、どのような超越論的現象学的本質の把握方法を用いたのだろうか。

1935年1月の草稿で、フッサールは、エポケー前とエポケー後の意識生に関連して次のように述べている。「エポケーの中に居ながら私は想起するのであり、しかもエポケーのかつての段階に属していたものを想起するのであり、このものそのものを想起するのであるが、しかしまた、そこでは私がいかなるエポケーも遂行しなかった私の〈自然的〉生をも想起するのである。こうした想起は、〈超越論的〉であり、それは、私が世界における人間としてもつ想起ではない。あらゆる人間的想起は、〈括弧に入れられ〉、括弧に入れられたものとしてのみ、現象としてのみ私にとって措定される。私は私の超越論的想起〔*meine transzendente Erinnerung*〕をもつのであり、超越論的想起時間性〔*die transzendente Erinnerungszeitlichkeit*〕において私は〈エポケー〉の道程〔*Strecke*〕をもつのであり、括弧に入れられた世界において（私の人間性という）括弧に入れられた人間性の或る道程をもつのである¹⁷。ここで、留意されるべき事は、「超越論的現象学的想起」について明確に語られているということである。『イデーニ I』（1

913年)において一応体系化された形で記述されたフッサール中期思想の現象学的還元は、「空想における反省」という形を取り、しかも、その際の空想は、実在界との結び付きを断ち切る純粋空想であった¹⁸。しかし、ここで、フッサールは、フッサール後期思想の最晩年の現象学的還元が、「想起における反省」という形を取り、「実在的世界経験としての自然的生」を範例的サンプルとしてその「事実的本質」を把捉する、ということを明言しているのである。

また、フッサールは、別の箇所でも次のようにも述べている。「エポケーの着手の道程は、超越論的自我論的現在に属する、エポケーによる世界の変様の想起の道程であり、世界現象を所有していたという遂行における顕在的所有の道程である。エポケーによる現在の世界現象が世界の今の知覚を変様したように、エポケーの想起としての過去の世界現象は、過去の知覚を変様した。つまり、超越論的想起は、自然的 - 人間的想起の変様 [Modifikation der natürlich-menschlichen Erinnerung] である」¹⁹。ここで、超越論的想起は、自然的 - 人間的想起の変様と言われているが、自然的 - 人間的想起の内容は、「実在的世界経験としての自然的生」であり、世界内的存在としての「世界生」である。

それゆえ、フッサールは、同時期(1935年1月)の未公開遺稿B II 1 2で次のように述べている。「エポケーを以て、私は、或る普遍的主題的転換 [eine universale thematische Wandlung] を遂行する。私が世界生の自然的遂行および世界生を前提する理論的生の遂行を諦めることによって、普遍的に不屈の一貫性において、私は、差し控えという変様において世界現象をもつのであり、……一切は、エポケーの中で現象であり、今や、私は、私にとって可能であるような新たな主題に対する或る理論的関心を確立する。そのような新たな主題とは、さしあたり、私がそれをエポケー以前に実行できたし、それに基づく理論的世界問題性の現実性および可能性を私が実行しうるような私の自然的生活環境世界の〈現出〉の普遍的構造 [die universale Struktur-“Erscheinung” meiner natürlichen Lebensumwelt] である。しかし、そうした事は、私が世界を現象として記述するというようにして成立するのであり、それゆえ絶えずエポケーによって始まるこうした変様の中で成立するのであり、或る種の記号変様 [eine Art Vorzeichenmodifikation] としてはもはや何も始まらない」²⁰。ここで明言されているように、超越論的現象学的エポケーによる普遍的主題的転換によって獲得されるものは、世界現象であり、主題は、

「自然的環境世界の〈現出〉の普遍的構造」である。そして、その析出の仕方は、ここで「或る種の記号変様」と呼ばれているようなフッサール中期思想における純粹空想変様を介しての析出の仕方ではなく、「事実的本質」を把捉するための新種の析出の仕方である。

そうした「事実的本質」を把捉するための新種の析出の仕方に関連して、フッサールは、未公開遺稿 B II 1 2 において次のように述べている。「生の解釈 [die Auslegung des Lebens] は、時間的経過中のそのつどの諸作用をその諸構造において単にもたらすばかりでなく、我々が前述において語った諸地平 [die Horizonte] をもたらすのであり、そして全世界地平 [der ganze Welthorizont] をもたらすのであり、諸々の人間にとってそのつどの世界現在において妥当する世界がどのように最広義において意識されあるいは決定されるのかというその仕方をもたらすのである」²¹。ここで、「事実的本質」を把捉するための新種の析出の仕方は、「生の解釈」と言われているが、解釈されるものは、「自然的生」であり、析出されるものは、諸地平構造を含む世界経験の本質的構造である。そうした析出の仕方は、フッサールによって「エポケーおよび還元による〈自然的〉生の超越論的生への転換 [die Verwandlung des “natürlichen” Lebens durch Epoché und Reduktion in das transzendente]」²²と呼ばれているが、超越論的生の本質的構造として析出されるものは、自然的生の事実性に根ざした「事実的本質」である。

それゆえ、フッサールは、1935年1月時点で、最晩年の超越論的現象学的本質つまり自然的生の事実性に根ざした「事実的本質」を把捉するために、「超越論的想起」という超越論的現象学的本質把捉の方法を用いたものと言える。

〔6〕「事実の本質」の把捉の具体的操作としてのヴァリエーション

それでは、超越論的現象学の本質把捉の具体的操作は、どのようなものなのか。フッサールは、1935年秋の未公開草稿 K III 1 2 において、次のように述べている。「本質論 [Wesenslehre] に関しては、もちろんあらゆるものが範例として機能しうるのだが、私は、一切の事実性から解放された自由なヴァリエーション [eine freie, von aller Faktizität befreite Variation] を必要とするのであり、諸事実から防護された空想 [eine sich von Tatsachen freihaltende Phantasie] を必要とするので

ある。しかし、この場合、まさに、いかにして私が事実性から解放されるのかという問題が存するのではないのか」²³。ここで述べられているように、超越論的現象学的本質論は、事実性を有するあらゆる世界経験的範例を反省的分析的对象として純粹空想カプセル中に収めて自由なヴァリエーションを施して超越論的現象学的本質を析出しなければならないが、その超越論的現象学的本質は、一切の事実性を遮断するものでなければならない。ここに、フッサールの最晩年の超越論的現象学的反省は、一方で事実性から出発するにもかかわらず、他方で事実性を遮断しなければならないという困難を抱えることになる。それに対して、『イデー I』（1913年）において一応の体系化をみるフッサール中期思想の超越論的現象学的反省は、単に純粹空想変様を介して現象化された世界経験的範例から超越論的現象学的本質を析出するだけのものであった。つまり、フッサールの最晩年の超越論的現象学的反省は、アリストテレスのエイドス（形相）概念を彷彿とさせるような「事実性に基づく本質」に固執するところに特性をもつものと言える。

したがって、フッサールは、次のように述べることになる。「エイドスのヴァリエーション化されたものとしての空想可能性は、自由に宙に浮かんでいるのではなく、私がそれを事実上生きており必定的に見いだす私の生き生きとした現在を伴い、そしてそのうちに露わに存する一切のものを伴う私の事実 [Faktum] における私に構成的に関係づけられている」²⁴。それゆえ、ヴァリエーションの空想可能性は、フッサール中期思想の自由に宙に浮かんだ純粹空想可能性ではなく、事実性に関係づけられたものなのである。

そこで、フッサールは、次のようにも述べる。「私は、必定的に未知性の開かれた地平を伴って、或る本質形式の内部で未規定性というあり方として未規定である。こうした本質形式は、現実的存在の諸可能性としての諸可能性という意味をもっており、……そのうちの一つが現実的であらざるをえないような未規定ではあるが実在的な開かれた諸可能性をもつということによって、単なる虚構、単なる〈あたかも……のように〉を越えている。そのことによって初めて、エイドスは、存在者の諸可能性の形式となる。それゆえに、現実性は、諸可能性に先行し、諸空想可能性に初めて実在的諸可能性という意味を与える」²⁵。ここで述べられているように、フッサールの最晩年の超越論的現象学的本質は、「現実的諸可能性としての諸可能性」という意味をもち、「そのうちの一つが現実的であらざるをえないよう

な未規定ではあるが実在的な開かれた諸可能性」をもつ。そして、それは、単なる虚構つまり単なる純粹空想変様を越えた「事実性に基づく純粹空想変様としてのヴァリエーション」によって初めて獲得されるエイドスとして、「存在者の諸可能性の形式」となる。そこでは、「諸可能性に先行し、諸空想可能性に初めて実在的諸可能性という意味を与える現実性」としての事実性が、クローズアップされる。

まさに、そうであるからこそ、フッサールは、次のように総括することになる。

「世界の形相学 [Eidetik] における空想は、まさに諸存在地平の方法であり、〈必当的〉世界確信によって拘束されている」²⁶。それゆえ、1935年秋の時点のフッサールは、おそらくはナチス台頭による不遇な状況下で自己の実在的色彩を深めながら現実性に根ざした「事実的本質」の把握に固執し、「最晩年の超越論的現象学的本質把握の具体的操作としてのヴァリエーション」という「〈必当的〉世界確信によって拘束された世界の形相学における空想」を用いたものと言える。

結語

本論によって、次のような事が明らかにされた。第一に、1933年3月初めの時点での「最晩年の現象学の射程」は、世界内的現象学（現象学的心理学）における個別のエポケーが超越論的現象学における世界エポケーに対して部分的エポケーとして位置づけられる、ということが明らかにされた。第二に、1933年8月半ばの時点での「最晩年の前所与性から出発する遡行的問いの里程」は、自然的世界内性の次元で遂行される世界内的現象学（現象学的心理学）を經由して超越論的現象学へ至るという構図を取る、ということが明らかにされた。第三に、1933年9月の時点で、「自然的世界生を前提とした普遍のエポケー（超越論的現象学的エポケー）」によって、世界内的現象学（現象学的心理学）には隠されたままであった超越論的構成ないし超越論的世界創造の「露呈」ないし「解釈」ないし「解明」が遂行される、ということが明らかにされた。第四に、1934年春の時点で、『危機書』で取られる超越論的現象学へ至る二つの道つまり「存在論を介しての道」と「心理学を介しての道」を胚胎している、ということが明らかにされた。第五に、1935年1月の時点で、最晩年の超越論的現象学的本質つまり自然的生の事実性に根ざした「事実的本質」を把握するために、「超越論的想起」という超越論的現

象学的本質把握の方法を用いた、ということが明らかにされた。第六に、1935年秋の時点で、「最晩年の超越論的現象学的本質把握の具体的操作としてのヴァリエーション」という「〈必当然的〉世界確信によって拘束された世界の形相学における空想」を用いた、ということが明らかにされた。

注

(1) Edmund Husserl, *Husserliana*, Band VI, *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie. Eine Einleitung in die phänomenologische Philosophie.* hrsg.v.W.Biemel, 2 Aufl., 1976.

(2) 未公開遺稿 K III 1 2・B II 1 2・B II 1 1からの引用については、ベルギーのルーヴァンカトリック大学付属フッサール・アルヒーフから引用許可を得た。

(3) Edmund Husserl, *Husserliana*, Band XX XIV, *Zur phänomenologischen Reduktion. Texte aus dem Nachlass (1926-1935).* hrsg.v.S.Luft, 2002(以下、Hua. XX XIV.と略).S.435.

(4) *Ibid.*, S.435.

(5) *Ibid.*, S.437.

(6) *Ibid.*, S.438.

(7) *Vgl. ibid.*, S.446.

(8) *Ibid.*, S.447.

(9) *Ibid.*, S.447.

(10) *Ibid.*, S.450f..

(11) *Ibid.*, S.463.

(12) *Ibid.*, S.463f..

(13) *Nachlass*, B II 11 S.4a.

(14) Hua. XX XIV, S.467.

(15) *Ibid.*, S.467.

(16) *Ibid.*, S.467f..

(17) *Ibid.*, S.497.

(18) 拙著『フッサールの脱現実化的現実化』（晃洋書房、2006年）を参照されたい。

(19) Hua. XX XIV, S.492.

(20) Nachlass, B II 12 S.4a.

(21) Ibid.,S.2b.

(22) Ibid.,S.3a.

(23) Nachlass, KIII 12 S.11a.

(24) Ibid.,S.25b.

(25) Ibid.,S.25b.

(26) Ibid.,S.26a.

[追記] 本論は、平成21年度科学研究費補助金基盤研究(C)の成果である。

(ほり・えいぞう 大分工業高等専門学校一般科文系教授)